

令和元年6月19日現在

機関番号：13301

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2018

課題番号：26463406

研究課題名(和文) 乳児の泣きに対する母親育児支援プログラムの構築

研究課題名(英文) A study on the development of a support program for mothers of crying infants

研究代表者

田淵 紀子 (Tabuchi, Noriko)

金沢大学・保健学系・教授

研究者番号：70163657

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,800,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、児の泣きに着目し、泣きの見極めができるようになる時期などを示したリーフレットを用いて情報提供を行う介入群と通常ケアを行う対照群での継続調査の結果を比較検討した。生後1ヶ月時点での母親の困難感および生後8ヶ月時点での困難感は、両群間で有意な差は認められなかった。すなわち、介入による効果はみられなかった。

一方、妊娠中の母親の不安傾向とストレス対処能力が産後の泣きに対する困難感に影響しているのではないかと分析したところ、妊娠中の不安傾向が高いほど、産後の泣きに対する困難感が高いこと、反対に妊娠中のストレス対処能力が高いほど、産後の泣きに対する困難感が低いことが明らかとなった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

産後の母親の育児困難感が増強し育児ノイローゼに陥らないような支援が必要と考えている。本研究では、母親が育児を困難に感じる要因の一つで“児の泣き”に着目している。児の泣きに特化して抱く母親の困難な感情に焦点をあてており、極度な育児不安や育児ノイローゼに陥らないように、育児支援プログラムの効果が検証できれば、母親の育児困難感が軽減され、母性保健の向上に貢献でき、乳幼児虐待等のリスク発生の予防につながる。

研究成果の概要(英文)：Mothers who rear their child for the first time can feel perplexed at how to cope with an infant who does not stop crying or feel difficulty in childcare.

In this study, we focused on the crying of the child. We compared the results of a follow-up survey between the intervention group who were provided with information leaflets that indicated when it would be possible to determine the reason for crying and ways of dealing with it. There was no significant difference between the two groups regarding the mother's sense of difficulty at 1 month of age and at 8 months of age. That is, no effect of the intervention was observed. It was found that anxiety and the ability to cope with stress during pregnancy are related to the mothers' feelings toward the crying of their infants. Continuous support for women from the period of pregnancy is necessary, and its positive effects can be expected.

研究分野：助産学

キーワード：育児困難 児の泣き 育児支援 介入 不安傾向 ストレス対処能力

## 1. 研究開始当初の背景

乳児の“泣き”は産声に始まり、その後数か月間は、乳児の内的情報(空腹、不快、甘え等)を伝達する最も顕著な行動である。とくに言葉を獲得する以前の時期においては、自らのニーズを伝達する重要な手段の一つとなる。母親が乳児のニーズを適切に判断し、満たすことで乳児は泣き止むが、乳児のニーズが満たされないと、乳児は泣き続けることとなる。母親はなぜ乳児が泣くのかかわからず、途方に暮れることになり、何をしても泣きやまない乳児を前に自分の無力さを感じ、そのことがこれから先の育児に不安を抱く要因ともなり得る。乳児の咽頭・口蓋の解剖学的発達の特徴上、出生時から2~3ヶ月頃までは、泣き声から乳児のニーズを判別することは難しい(Pineyard, 1994)。とくに育児経験のない母親の場合は、児の泣き声はいつも同じように聞こえ、泣き声から乳児のニーズを見極めることは難しい(田淵, 1999)。一方、育児経験のある母親の場合には、これまでの経験を活かし、前回の授乳時間や乳児のしぐさなどから、泣きの意味を予測していることが多かった(田淵, 1999)。これらの結果から、とくに初産婦の場合は、経産婦に比べると乳児の泣きの見極めにおいて困難感を抱きやすく、よりハイリスクな状態といえる。

最近、問題となっている子どもの虐待の原因に、児が泣きやまないことによる感情抑制不足があげられている。児の泣き声は母親を乳児の元へと引き寄せるものであるが、ときに乳児の泣き声は母親のストレス源ともなり得る。乳児の泣きに対し困難感や不安を増大させることは、その後の育児ノイローゼや虐待などの危険性につながる可能性を秘めていると言っても過言ではない。したがって、このような状況を予知し、母親の育児困難感や不安軽減に貢献できる育児支援プログラムの開発が急務である。

## 2. 研究の目的

(1) 児の泣きに対する母親の困難感を軽減するために、リーフレットを用いた妊娠中からの情報提供による介入の効果을明らかにする。

(2) 妊婦の不安傾向やストレス対処能力と産後の母親の育児困難感や児に対する情動反応との関連を明らかにする。

## 3. 研究の方法

妊娠中および分娩後にリーフレットを用いて情報提供をする介入群と対照群との比較研究であり、継時的に出生後7~8ヶ月までの母親の育児困難感と情動反応を比較する。

(1) 対象者; 正期産(37週以降)での分娩が予測される初産婦、単胎とする。介入群、対照群ともに50名程度を予定。石川県内の出産施設で研究の同意の得られた2施設の妊婦健診受診の妊婦に協力の依頼を行い、文書による同意を得た。

### (2) 介入の方法と内容

リーフレットを用いて介入プログラムを実施する群を介入群とする。用いるリーフレットは、これまでの調査結果のデータをもとに、児の泣きで困難感を抱く時期や、泣きの見極めができていく時期の情報と泣きへの対処方法を提示した(根拠となるデータはグラフで示し、児が泣いた時の対処方法はイラストで示した)ものである。

(3) 調査の時期; プロトコル(図1)に示したように、介入群、対照群ともに4時期(妊娠後期, 分娩入院中, 生後1ヶ月, 生後7~8ヶ月)とする。

(4) 調査項目

State-Trait Anxiety Inventory-Form JYZ (以下、STAI とする)

Sense of Coherence (以下、SOC とする)

育児困難感尺度 (Tabuchi & Shimada, 2005)

情動反応尺度 (田淵他, 2006)

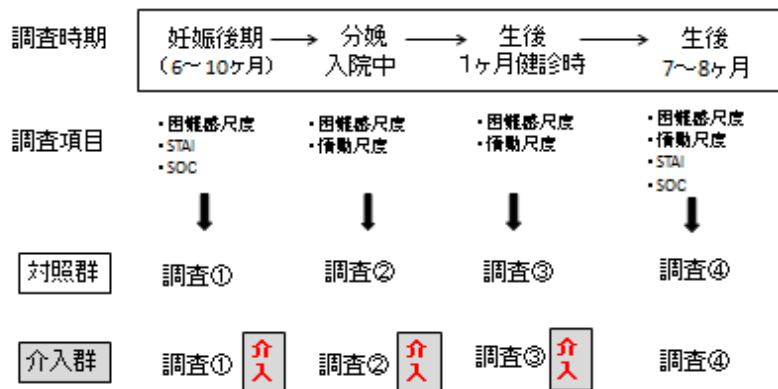


図1. 調査のプロトコル

(5) 調査方法

研究同意の得られた妊婦に調査を実施後、介入群には、リーフレットを用いて内容を説明する。

分娩後の入院中に調査を実施後、介入群には、もう一度リーフレットを用いて再度説明する。

1ヶ月健診時に調査を実施後、介入群には、リーフレットを用いながら、1ヶ月間に児の泣きで困ったことがないか相談を受けるとともに、今後の見通しを説明、対処方法等を一緒に考えながら提示していく。

生後7~8ヶ月時に郵送にて調査を行う。

調査①は留め置き法にて、調査②③は、郵送にて配布・回収とする。

4. 研究成果

(1) 研究同意が得られた2施設80名のうち、早産事例を除外し、妊娠中ならびに生後1ヶ月、8ヶ月と継続して調査回答が得られた50名(有効回答率62.5%)を分析した。

介入群(n=22), 対照群(n=28)ともに児の出生体重, 在胎週数に差はなかったが, 妊婦の年齢において介入群 32.6±6.0 (平均±標準偏差)歳は対照群 29.3±5.0歳に比べて有意に高かった(p=0.037)。妊娠中の STAI 得点, SOC 得点ともに両群間に差はなかった。困難

感得点は、1ヶ月時介入群 27.4±5.0点、対照群 27.4±3.9点、8ヶ月時、介入群 25.4±4.3点、対照群 24.6±4.0点でいずれも両群間に有意な差はなく、1ヶ月時よりも8ヶ月時で困難感得点は低下した。妊娠中のSOC得点と産後の困難感はいずれの時期も有意な負の相関を認めた。また妊娠中のSTAI得点は、産後の困難感と有意な正の相関を認めた。

本研究における対象妊婦の不安得点ならびにSOC得点は、ともに一般女性の平均ないし平均以下であり、児の出生体重も正常範囲内にあり、一般的な初産婦が対象であった。介入群、対照群の2群間で産後1ヶ月、産後8ヶ月ともに困難感得点に差がみられなかったことから、介入による効果は明らかにできなかった。

(2) 妊婦の不安傾向やストレス対処能力と産後1ヶ月時点での母親の育児困難感や児に対する情動反応との関連を分析したところ、以下の知見が得られた。

妊娠中の状態不安は、38.6±8.6点、特性不安 40.8±9.0点、SOC 56.4±10.2点であった。児の泣きに対する困難感と妊娠中の状態不安、特性不安とは有意な正の相関( $r(p) = .588$   $p = .000$ ,  $r(p) = .623$   $p = .000$ )が、SOCとは有意な負の相関( $r(p) = -.431$   $p = .002$ )がみられた。また、児が泣いているときのnegativeな情動と妊娠中の状態不安、特性不安とは有意な正の相関( $r(s) = .384$   $p = .007$ ,  $r(s) = .369$   $p = .009$ )が、またSOCとは有意な負の相関( $r(s) = -.304$   $p = .032$ )がみられた。以上、妊娠中の不安傾向やストレス対処能力と産後1か月における母親の児の泣きに対する困難感や児に対するnegativeな情動との間に有意な相関関係がみられた。これらの結果より、妊婦の不安傾向やストレス対処能力を把握することで、産後の育児困難を見据えた妊娠期からの介入が期待できると考える。

## 5. 主な発表論文等

[学会発表] (計4件)

田淵 紀子、鏡 真美、小西 佳世乃、毎田 佳子、妊娠中の不安傾向やストレス対処能力と産後の泣きに対する困難感や情動との関連、第33回日本助産学会学術集会(福岡)、2019.3.3.

田淵 紀子、鏡 真美、小西 佳世乃、毎田 佳子、児の泣きに関する情報提供や妊婦の特性と産後の母親の困難感との関連、第32回日本助産学会学術集会(横浜)、2018.3.4.

田淵 紀子、鏡 真美、小西 佳世乃、乳児の泣きに関する情報提供による産後1ヶ月時の母親の困難感、第37回日本看護科学学会学術集会(仙台)、2017.12.17.

田淵 紀子、鏡 真美、河村 美芳、島田 啓子、乳児の泣きに対する困難感と育児不安・ストレス対処能力との関連、第31回日本助産学会学術集会(徳島)、2017.3.18.

## 6. 研究組織

研究協力者氏名：小西 佳世乃

ローマ字氏名：(KONISHI, kayono)

所属機関名：金沢大学

部局名：保健学系

職名：助教

研究者番号(8桁)：80708470

研究協力者氏名：鏡 真美  
ローマ字氏名：(KAGAMI, naomi)  
所属機関名：金沢大学  
部局名：保健学系  
職名：准教授  
研究者番号(8桁): 60334786

研究協力者氏名：毎田 佳子  
ローマ字氏名：(MAIDA, yoshiko)  
所属機関名：金沢大学  
部局名：保健学系  
職名：教授  
研究者番号(8桁): 20397219

研究協力者氏名：島田 啓子  
ローマ字氏名：(SHIMADA, keiko)

研究協力者氏名：三村 あかね  
ローマ字氏名：(MIMURA, akane)

研究協力者氏名：頼 玲瑛  
ローマ字氏名：(RAI, reiei)

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。